

情報教育機器を活用したへき地学校におけるキャリア教育の実践

福島町立福島中学校を例に

鈴木 聖一
(福島町立福島中学校)

松浦 俊彦
(北海道教育大学函館校)

Practice of The Career Education in Remote School Using Information Instruments Example of The Fukushima Junior High School

Sei-ichi SUZUKI and Toshihiko MATSUURA

1. はじめに

近年、「ニート」と呼ばれる若者が急増している。ニート (NEET: Not in Employment, Education or Training) とは、「特定の職業に就労せず、将来の就職のために学習などの準備を行っていない、主たる収入を持たない人」のことを指す。この背景には、高い失業率や気軽な労働形態の一つであるフリーターと呼ばれる若者の増加などがあげられる。これらの実態を受けて、文部科学省は平成14年11月に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」を発足させ、その報告書を平成16年1月に公表した。また、文部科学大臣をはじめとする関係4閣僚などにより、平成16年12月には「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」が出され、翌17年10月には農林水産大臣を加えてさらに強化され、「キャリア教育」はニート対策の大きな柱として位置づけられた。上述のような社会の要請を受けて誕生した「キャリア教育」は現代的な教育ニーズの一つとして学校現場への導入が急速に進められている。キャリア教育は体験的な学習を重視している点と、個々の発達段階に応じて体系的に学習課題を設定した長いスパンでの児童生徒の育成を目指している点に特徴がある。また、従来の進路指導をベースに内容の拡充を図ると共に、学校における様々な教育活動を有機的に結びつけることで、生徒個々の発達を効果的に促進していくことが求められている。

本論文では、キャリア教育導入のために行った教育課程の編成を含めた様々な実践について、へき地指定学校である北海道福島町立福島中学校の事例を報告する。キャリア教育の実施に関わるへき地特有の問題に対する解決策として、情報教育機器を有効に活用したことを述

べる。なお本論文の内容は平成15年度から18年度に行ったものが中心である。

2. キャリア教育についての学校現場の意識

「キャリア教育」という言葉が登場して、まだ5年程度である。本研究を開始した当時はもちろんのこと、現在もなお一部の学校現場ではその理念等の浸透が十分ではない。本実践を紹介する前に、キャリア教育の定義や目指す姿についてまとめておきたい。

文部科学省では、キャリア教育を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義している。端的に言えば「児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てる教育」となる。また、これらの実現のために、学校の教育活動全体を通して、児童生徒の発達段階に応じた小学校段階からの組織的・系統的なキャリア教育の推進が必要であるとしている。実際の教育現場の中では、「キャリア教育＝職場体験学習」という意識が先行している。たしかに、文部科学省は中学校に対して「連続5日以上職場等での体験学習を実施するように」と呼びかけている。しかし、今までも多くの中学校で1日程度の「職場体験学習」を実施している。他にも、進路指導では「職業に関する指導」について効果的な実践も報告されている。ところが、こうした職業に関する学習はそれぞれの分野で行っているものの、3年間を見通した系統的な位置づけは十分になされていなかった。つまり、教育課程の中に明確に編成されていなかったと言える。そのため、相互の学習に関連性がない場合や、学級担任および学年団の方針によって

扱い方が大きく異なる場合も少なくはなかった。したがって、キャリア教育という新たな視点で教育課程を編成することが重要となる。

3. 福島中学校におけるキャリア教育実施のための教育課程の編成

福島中学校では、総合的な学習が導入される以前から職業体験学習を行ってきた。3年生が町内の商店や施設で1日職業体験学習を行い、その結果をレポートとしてまとめていた。しかし、これはあくまで特別活動の領域における学習であったため、進路指導などとの関係性が薄かった。キャリア教育という視点で、平成16年度に道徳教育、特別活動および総合的な学習の時間を中心に3年間を見通した教育課程を考案した。このとき、従来3年生で実施していた「職業体験学習」を2年生で実施するように変更した。これを中核として総合的な学習の時間の教育課程に「職業に関する調べ学習・体験学習」を位置づけた。道徳教育や特別活動においても、「自己理解の深化」、「社会への適応」、「進路」などに関する学習を明確に位置づけ、相互に関連性が持てるように再編した。これにより、学年ごとの縦のつながりおよび教科ごとの横のつながりが確立され、キャリア教育実施への基盤となった。

福島中学校における道徳教育は年間35時間の時数が確保されている。その時間ごとの価値項目や用いる資料について、年間指導計画の中に詳細に位置づけた。表1に代表例として平成18年度の3年生用道徳年間指導計画を示す。福島中学校では、「(1) 主として自分自身に関すること」、「(2) 主として他の人とのかかわりに関すること」、「(3) 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」、「(4) 主として集団や社会とのかかわりに関すること」という4つの価値項目を設定した。このうち、キャリア教育と深く関わる要素は(1)と(4)である。表2にキャリア教育に関連する道徳教育の学年別実施時数をまとめる。「(1) 主として自分自身に関すること」では、自分自身の内面を問う問題や長い人生を歩む上での生き方などを主題にした題材を多く取り上げた。生徒一人一人が自分自身の生き方について考えることは、自己理解を深めることにつながり、正常なキャリア発達の根幹を成すものと言える。こうした自己理解の深化にかかわる価値項目については、3年間で時数にして24時間学ぶ。「(4) 主として集団や社会とのかかわりに関すること」では、生徒個々の社会性を高めることで、望ましい勤労観や職業観の根幹の一つとして資する。こうした社会への適応にかかわる価値項目については3年間で27時間学習する。

表1 3年生の道徳年間指導計画（平成18年度版）

平成19年度 第3学年 道徳 年度			
月	学校行事	主題名・資料名	指導目標
4月	新しい生活のスタート ○始業式 ○入学式 ○学級開き ○学級組織・生徒会組織決定 ○家庭訪問	道徳授業の受け方	人間として必要不可欠で大切な間で学習していくづかせる。
		「やればできる」	1-① 節度と調和 自分の弱点を弱みに、反省する力が必要なことと調和の必要性を知る。
		「薄墨の板」	3-① 自然愛護 自然を愛し、感動する心を通しや長歌の念を正確し、大切に育てる態度を養う。
		「相手の立場を考える」	4-① 集団生活の向上 集団の一員としての責任を自覚し、理解し尊重し、協力し合

表2 キャリア教育に関連する道徳教育の学年別実施時数

	1年	2年	3年
(1) 主として自分自身に関すること（自己理解の深化）	9	7	8
(4) 主として集団や社会との関わりに関するもの（社会への適応）	9	9	9

特別活動の時間は、「生徒会活動」、「学校行事」、「学級活動」の大きく3つに区分される。生徒会活動においては、生徒の主体性と自主性を育むような活動に力を入れた。具体的には、生徒会書記局が中心となる様々な生徒集会やすべて手作りの生徒会誌の編集など、時間をかけてアイデアを出し合い、企画・運営に生徒が直接携われるように工夫した。学校行事においても、生徒の主体性を重んじるように企画・運営されている。特に学校祭は生徒会による主体的な活動の集大成として位置づけられている。これら活動は生徒のキャリア発達に重要な要素である。すなわち、集団の中で自他を高め、その集団をより良くしようという姿勢や態度が養われる。さらに、年間35時間の学級活動については、発達段階に配慮した詳細な年間指導計画を作成した。表3に学級活動における指導項目ごとの学年別実施時数をまとめる。生徒のキャリア発達を考える上で、「自己理解を深める内容」は欠かせない要素である。なぜなら望ましい職業観や労働観とは、生徒個々の個性や長所・短所などを自分自身が把握した上で成り立つものだからである。そのため、3年間コンスタントな配時としているのが特徴である。なお、年度初めの学級開きや各種行事における学級準備

表3 学級活動における指導項目ごとの学年別実施時数

	1年	2年	3年
学級組織・集団に関する内容	14	14	11
自己理解を深める内容	11	11	11
進路に関わる内容	10	10	13

表4 総合的な学習の時間の学年別年間学習計画

平成18年度 総合的な学習の時間 年間学習計画			時数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	
1年 100時間 週3回程度	情報スキル	情報教育の指導項目による内容	13	6	6								1			13	
	地域探訪	地域を見つめる(含学習の仕方㊸)	37		4	9	3	3	18							37	
	宿泊研修	道南を探る	20										3	2	9	6	20
	個による調べ学習		15							4	5	6				15	
	クリーンタウン作戦		15				6									15	
	計			100	6	10	9	9	3	18	9	9	9	3	9	6	100
2年 85時間 週2回程度	情報スキル	情報教育の指導項目による内容	6	1								5				6	
	宿泊研修	道南を探る 自主研修・組織作り	30		4	6	6	2	12							30	
	見学旅行		10										2	2	6	10	
	個による調べ学習	職場体験(含学習の仕方㊹)	24	5	7	12										24	
	クリーンタウン作戦		15				6			5	4					15	
	計			85	6	11	18	12	2	12	5	9	2	2	6	0	85
3年 130時間 週4回程度	情報スキル	情報教育の指導項目による内容	5	2	1				1	1						5	
	見学旅行	(含学習の仕方㊺)	50	9	7	15	6	2	11							50	
	個による調べ学習		20							8	6	6				20	
	国際理解		15		5				5		5					15	
	卒業記念作品		25										4	11	10	25	
	クリーンタウン作戦		15				6			5	4					15	
計			130	11	13	15	12	2	17	14	15	6	4	11	10	130	

の時間を考慮すると「学級組織・集団に関する内容」が3年間で最も多くなる。また、高校受験等があるため3年生の「進路に関わる内容」が多くなるのも当然である。

福島中学校における総合的な学習の時間の学年別年間学習計画を表4に示す。福島中学校では平成15年度から「情報教育」を研究主題に据えて、パソコンなどの情報機器を扱う力の育成に重点を置いてきた。その中核が総合的な学習の時間における「情報スキル」という学習である。「情報スキル」とは、情報機器の扱い方や情報モラルに関する学習をはじめ、様々な調べ学習を行う上でのマナーや人との接し方などを習得する学習である。コンピュータはもちろん、デジタルカメラやスキャナーなどの情報機器を積極的に活用し、ワープロソフトや表計算ソフトなどを使って、レポート等を個人個人で作成できるように習得させる。個人差はあるものの、生徒が情報機器になじみ、3年間で一通りの情報機器の扱い方や各種アプリケーションの使い方に習熟できた。これにより、様々な調べ活動や体験活動に生かすことのできる素地を作り上げた。他に、「クリーンタウン作戦」とは自分たちが住む地域を見つめ、より良い環境を作り出すために何ができるかを考え、地域住民と共に様々な清掃活動を行う。1年生で実施している「地域探訪」とは地域の自然や産業などをテーマに、職場訪問やアンケート、インタビューを行い、調べた結果をレポートにまとめる活動である。これを発展させ、2年生では宿泊研修中の自主研修において、同じ道南の他市町の様々な自然や文化、産業について職場訪問やアンケート、インタビューを行い、調べた結果をまとめる。3年生では東北地方の自主研修で同様の学習を行う。総合的な学習の時間にお

けるこれらの取り組みは間接的に生徒のキャリア発達を促している。特に、職場訪問などへつながらる地域探訪→宿泊研修自主研修→見学旅行自主研修は、自分の興味に基づき様々な職業に実際に触れる機会でもある。生徒は言葉遣いやあいさつの仕方、時間を守るなど日常の学校生活とは異なる環境で「勤労観」へと繋がる基本的な様々な事柄を体験する。

総合的な学習の時間における「職業に関する調べ学習・体験学習」は2年生および3年生の「個による調べ学習」に相当する。この中で、2年生は「職場体験学習」を必ず行う。そして、3年生では2年生時の職場体験学習のまとめと発展的な学習を行う。これら職業に関する学習実践が44時間行われるように配時しており、福島中学校におけるキャリア教育の中心となる。

4. へき地学校におけるキャリア教育実施上の問題点

キャリア教育を実践するにあたり、へき地特有の問題点がいくつか出てくる。例えば、(i)ハローワークやジョブカフェなどの職業に関わる公的機関が町内にない、(ii)職業体験学習において、生徒が希望したり興味のある職種が町内にない場合がある、(iii)生徒のレディネスを考えたとき地域の影響(1次産業と2次産業が主体)が大きいため生徒の認知に偏りがある、などがあげられる。(i)については、人口7,000人を切る福島町のようなへき地においては、ハローワークに限らず、図書館や博物館、見学可能な工場施設などのハード面の問題がある。こうした施設のそろっている最も近い(約60km離れている)

都市である函館市は、車で約1時間30分はかかる。そのため、学習活動に組み入れるのは通常不可能である。(ii)についても同様である。ありがたいことに地域の理解があるため、好意的に受け入れてくれる企業は多いが、必ずしも生徒の興味には基づかない部分もある。最も大きな問題は(iii)である。たとえば、デパートや大きなスーパーなどが町内に存在しないため、これらの職種への漠然としたあこがれはあるものの、実感できるような情報に乏しい。また、福島町の地域性として、日ごろから家の手伝いとして「昆布干し」などの1次産業に従事している生徒もいる。こうした生徒は仕事に対して一定の知識や考えをすでに持っているため、多くの様々な職種から自分に適切な職種が何かを考えることを苦手とする場合がある。

5. キャリア教育のための情報機器の活用

上述のへき地学校特有の問題はインターネットや有用なアプリケーションを利用することにより解決することが可能である。近年、仕事探しに必要な労働情報の提供や職業・進路の選択および転職・再就職などについての悩みなどの相談業務を行う公的機関等が増えてきている。特に後者は、職業に対する理解と自分自身の性格や能力などが一致しないことが多々あるため、若者を中心に需要が高まっている。こうした背景の中、大阪府職業カウンセリングセンターでは、職業適性相談で利用する職業興味検査や性格検査の開発を行っている。特にこの機関では、近年のニート増加を受けて、平成16年度に若年者の就業に向けての自己理解を深め、適性にあった職

業・進路選択に役立ててもらうために「Prep-Y 職業興味検査」および「CaPT-Y 性格検査」を開発した。検査対象は概ね中学生から25歳までとされている。インターネットを活用すれば、これらアプリケーションソフトをダウンロードにより入手することができる。これら検査ソフトは生徒一人一人がパソコンを使える環境があれば授業等で簡単に利用可能である。また、得点集計などの計算結果もパソコン上で行うことができ、情報機器を扱える能力が生徒一人一人にあれば簡単に使いこなせる。これは個人情報保護の観点からも重要である。これら条件は情報教育に重点を置いてきた福島中学校にとっては大きな問題とならないため、これら検査ソフトを活用したキャリア教育を実施できる。

「Prep-Y 職業興味検査」は、異なる2つの職業を比べ、自分ならどちらを選ぶかを答えるテストで、7つの職業領域を代表する職業同士から選択を繰り返すことで、興味のある職業領域と興味のない職業領域がはっきりとグラフに出る。図1にPrep-Y 職業興味検査で画面上に示される質問の一部を例示する。「CaPT-Y 性格検査」は、主導性、親和性、創造性、熟考性、規則性および活動性の6つの志向を調べるのが目的である。この6つに関する質問に対して、「はい」か「いいえ」で答えることで、それぞれの領域に対する志向性がグラフで表される。なお、これら検査は自分自身を客観的に知ることを目的としたテストであり、個人の能力を測るものではない。また、性格検査も得点が低くても人格を否定するものではない。例えば、「主導性」が高い生徒は「人に指示する力・説得する力」があることを示すが、低い場合は「謙虚である・慎み深い」ことを示す。このため、生徒は自分の

番号	A	数	B
1	しよくじ えいようかんり 食事の栄養管理のために、こんだてを考える		にわ うえき てい 庭をつくったり、植木を手入れする
2	きゃく うけつけ 接客の受付をしたり、案内をする		ふく かんが 服のデザインを考える
3	うんてん 車を運転する		せつけいず パソコンで設計図をかく
4	かべがみ 壁紙やカーペットをはって、部屋を仕上げる		かいしゃ けいえい せんもんてき 会社の経営について専門的にアドバイスする
5	ほん ざっしう 本や雑誌を売る		はんざいそうさ まち 犯罪捜査や街のパトロールをする
6	ふくしせいせつ そうだん 福祉施設で相談にのったり、生活の指導をする		がくたん がっき えんそう バンドや楽団で楽器を演奏する
7	テレビやラジオの番組をつくる		ぬの そ いろ もよう 布を染めて色や模様をつける
8	しせつ けいび きゃく ゆうどう 施設の警備や客の誘導をする		しよひん こうじよう せいさんけいかく 商品について工場での生産計画をたてる
9	びやういん けつえき によけんさ 病院などで血液や尿を検査する		かてい かいしゃ しよひん 家庭や会社をまわって商品をセールスする
10	いろいろな材料でおもちゃをつくる		こうじげんば さきよ 工事現場で作業をする
11	たくはいびん いたつ 宅配便を配達する		ゆしゆつ ひつやう しよるい 輸出や輸入するものを調べ、必要な書類をつくる
12	きゃく せいせつ せいせつ 洋服の縫製をする		じどうしゃ ふね せつけい 自動車の修理をする

図1 大阪府職業カウンセリングセンター開発のPrep-Y 職業興味検査の質問例（転載）。2つの職業から一つを選ぶ操作を繰り返すことで、興味のある職業領域がグラフになる。

点の高低に関わらず、自己理解を深めることができるのが利点である。

6．福島中学校におけるキャリア教育の実践

6-1．2年生のキャリア教育実践

福島中学校では 総合的な学習が導入される以前から、町内の様々な職場のご好意で職業体験学習を行ってきた。その方法は、生徒が自分の希望に従い、町内の限られた候補の中から体験先を選び、学習をさせてもらう内容であった。このような体験学習を通して、社会的に必要な礼儀作法や仕事場での常識、働くことの意義などを学ぶ機会として捉えていた。生徒の感想としては、「働くために挨拶や礼儀の必要性を生徒が体感した」、「服装や身だしなみの重要性がわかった。」、「労働が大変だということがわかった」などが毎年出されていた。キャリア教育としては、これらも重要な要素であるには違いないが、職業に対する考え方や意欲付け、すなわち「職業観」としては十分とは言えない。そこで、以下のような職業観を育成するための明確な2つの目標を設定した。

- ・生徒一人ひとりが、将来の自己の進路を確立することを大きな目標とし、「職業体験」を通して、職業に対する自分の考え方・視点（＝職業観）を養うことを目標とする。
- ・望ましい職業観育成のために、自己理解を深める。情報機器を活用し、生徒が意欲をもって自己理解の深化を図れるような内容を工夫する。

キャリア教育に関連する総合的な学習の時間のなかでは「個による調べ学習」として全24時間の時数が計画されている。前半部分では職業体験学習を通して「労働とは何か」や「働くことの大変さ・重要さ」などを体験的に学んだ。後半部分では自己理解を深めるため、「Prep-Y 職業興味検査」と「CaPT-Y 性格検査」を行った。最後にそれらの成果を生徒たちにレポートにまとめさせた。

生徒の多くは社会経験が少なく、「職業とは何か」や「どのような種類があるのか」などはよく分かっていない。そのため、「将来なりたいものは？」と聞かれると、答えに窮する者も少なくない。このような現状を踏まえ、最初に「職業領域」についての説明を導入とした。表5に大阪府職業カウンセリングセンターの資料を参考にし、つくった7つの職業領域をまとめる。職業をその特徴によって7つのグループに分類し、そのグループごにどのような能力が必要なのかを考えさせることで、生徒たちが様々な職種について大まかに把握できるようにした。その上で、生徒たちに興味のある職業領域を選ばせ

た。この段階で、中には自分自身が理想としていた職業と自分の能力とのギャップについて知る者もいた。次に、生徒が実際に体験したい職業を選ぶ。しかし、上述のように町内で職業体験を行うとしても受け入れてもらえる箇所には限りがあり、生徒の希望する進路と必ずしも合致しない。しかし「職業領域」という観点から見れば、自分が理想とする職業はなくても、同じような能力を要求される他の職業を体験することはできる。このような設定によって、生徒は職業体験学習を通して「職業に必要な能力」について知ることを目的とし、自分の能力について考え（＝職業観）、自分自身の進路について考えるきっかけになるように、学習をプログラムすることができた。体験先が決まったところで、インターネットなどの情報機器を活用し、その職種に必要な免許や技能、職業の特徴およびその他自分自身が知りたいことについて調べさせた。調べた中での疑問点については、職業体験のときに直接職場の方にお話を伺えるようお願いした。写真1に代表例として美容室での職業体験学習の様子を載せる。

表6に職業体験学習を終えてのレポートから感想の部分を抜粋して表す。今までの福島中学校の例から言えば、職業体験学習で体験先を選ぶ基準として、「楽そうだから」、「面白そうだから」、「取りあえずやってみよう」、「友

表5 大阪府職業カウンセリングセンターの資料を参考にし、つくった7つの職業領域の分類

分類	職業領域
A	医療・福祉
B	サービス販売
C	ファッション・芸能
D	自然・工芸
E	作業・操作
F	技術・専門
G	事務・専門



写真1 美容室での職業体験学習の様子

達と一緒にやりたい」などの意見が多かった。その結果、職業体験学習を通して得たものも、「職業は大変だ」や「挨拶は大事だ」などと漠然としたものや職業観から離れた感想が多かった。しかし、本実践の結果、「サービス業は挨拶が大事だ」、「人と接する仕事は、笑顔が大切だ」、「高い技能がないといけないから、一生懸命勉強して免許を取らなくてはならない」などの感想が事後に聞かれた。つまり、生徒が進路選択というキャリア力を身につけるための一つのステップとして意識した体験活動を行うことができた。まとめにあたっては、体験学習の成果をまとめるだけでなくとどまらず、これらの検査をもとに「自己理解」を深めさせた。表7に示したように、Prep-Y職業興味検査を行えば、職業を「領域」として捉えることで、自分が興味をもつ仕事のほかに、関連性のある仕事についても知ることができる。この活動はへき地にあってはどうしても偏りがちになる知識を広げる一つのきっかけとして、重要であると考えられる。生徒にまとめレポートを作成させる中では、興味をもった仕事について必ずしも訪問や体験学習はできないが、インターネット

で調べることでその代替とした。また、生徒個々が情報機器を活用したレポートの発表会を行うことで、職業について幅広い知識を得ることができた。

6-2. 3年生のキャリア教育実践

2年時での職業体験学習はいわば「個」の扱いである。すなわち、個の興味に基づいた体験学習を行い、個としてまとめ、個としての理解を深める活動である。北海道教職員組合が毎年行っている合同研究集会の総合学習分科会では、「1本のバナナを見ても、様々な人と人とのつながりや関わりが見えてくる。遠い異国でバナナを作る人、船で日本まで運ぶ人、売る人、買う人」という観点を大切にしている。つまり、社会に出て仕事に就くということは様々な人との関わりを生む。また、仕事をすることは様々な協力関係の上に成り立つ。さらに、政治・経済・自然環境など社会の様々な要素が仕事の成り立ちや盛衰と大きく関わっている。つまり、産業構造という大きな集団で捉える視点やその素となる知識について学ぶ機会が必要である。そこで、3年生の総合的な学習の時間における「個による調べ学習」では、「キャリア教育～働くとは?」という主題のもと、以下のような3つの目標を設定した。

表6 職業体験学習を終えての生徒のレポート(抜粋)

○「特別養護施設陽光園」で実習したR.S.のレポート
・仕事をするのは難しいということ。しかも人の命を預かっているので大変だと思った。
・陽光園で働いている方たちは、ホームヘルパーやケアマネージャーの資格を持っていた。
・私が将来目指している職業とは少し違いましたが、人と接するという事は同じだったので、将来やりたい職業もこんな感じなのかと実感した。(R.S.は将来ハビリ関係の仕事につきたいと考えていた。)
○「ときわい塗装店」で実習したR.Y.のレポート
・ペンキを混ぜる作業が楽しかった。自分の作りたい色に近づけるのはとても難しかった。
・塗装の仕事は高いところで作業したり、色々なものを塗ったりするので、4つの資格が必要だと教えてもらった。
・自分が体験したことでは、ペンキを混ぜて色を塗る作業が難しかった。(R.Y.は美術的な分野への関心が高く、そういった観点から塗装店での実習を選択した。)

- ・1・2年生のときに学習した職業の種類や職業体験学習などをもとに、「労働」の意義や必要性について学ぶ。
- ・職業が様々な社会構造の中で相互に構造的に結びついて成り立っていることを知る。
- ・職業に関する様々な調べ学習を通して、将来の進路へ向けて自己理解を深める。

表8に3年生のキャリア教育の学習計画をまとめる。社会に出た後の様々なつながりについては、多種多様な方面からのアプローチが必要となる。そこで、まず「働くとはどういうことか?」ということを知るために、労働基本法などをもとに賃金や労働条件など労働者の権利について調べ学習を行った。経済の仕組みでも、特に職業に関わるという観点から、流通について取り上げた。さらに、エネルギーに関する問題や仕事、貿易に関わる仕組みや職業、環境問題に関わる職業などを各2時間ずつ行った。これらは社会科や理科などの授業で扱う内容

表7 Prep-Y職業興味検査から選んだ自分の希望職業(N.K.のレポートより)

職業領域	選んだ職業		
サービス販売	営業部員	スポーツ用品店員	書店員
作業・操作	スポーツインストラクター	自動車組み立て	船員
事務・専門	一般事務員	一般公務員	税理士

であるため、それらを基礎に発展的に学ぶことができる。また、生徒が調べた内容を発表し、教師から適切な助言があることで、大学のゼミのような学ぶ場とすることもできる。ただし、自然豊かな福島町では、環境問題について生徒はイメージしにくい。また、貿易や流通、エネルギーなどについても小さな町では実例となる工場や施設が町内にないため、実感できるイメージを持ちにくく、

表8 3年生におけるキャリア教育の学習計画

時数	指導項目	指導内容
1・2	賃金について	最低賃金や家計に必要な収支について知る。
3・4	労働について	労働条件から、働くことの意義を知る。
5・6	流通について	身近な商品から、流通について知る。
7・8	エネルギー	石油が日本の社会に与える影響を知る。
9・10	貿易	輸出入と、これに携わる仕事について知る。
11・12	環境	環境問題が職業に与える影響を知る。
13	職業のつながり	職業構造について知る。
14~20	まとめ	個人ごとにレポートでまとめる

学習に入る上での障害となる場合もあった。このような問題についてもインターネットなどを活用することにより解決できた。最後にまとめの時間を設定し、生徒がそれまでの学習の中で興味をもった事柄についてレポートを作らせた。図2に生徒がまとめたレポートの代表例を示す。エネルギーについての調べ学習を発展させて、電気をテーマに様々な関連企業などを調べ、図にまとめている。

へき地という地域性から、職業に関する学習や体験活動を行う場合、見学や体験を行う施設の不足、地域による事情、生徒のレディネスなど様々な問題点や困難な課題があった。しかし、これらへき地としての問題はインターネットを活用することで大きく改善することができた。また、近年の情報化社会ではキャリア教育に相応しいホームページなども多く登場してきているので有効に活用してもらいたい。

6-3. キャリア教育実践のまとめ

今、求められているキャリア教育とは、小中高の一貫した職業に関する教育である。しかし、既存の教育課程を否定するものではない。教科や特別活動、道徳、総合的な学習の時間での体験活動など、学校現場で行われるあらゆる活動の中で関連する部分を同じベクトルで目指すことによって、児童生徒が一人の人間として社会に出て、自立して職業につくことができるようにしようというものである。福島中学校では、これまで述べてきたような職業に関する学習活動を計画的に実施してきている。図3に示すように、それぞれの活動は相互に関係を持っているので、担当の教師あるいは教師集団が共通の認識の下、児童生徒に指導することにより大きな成果が期待できるだろう。

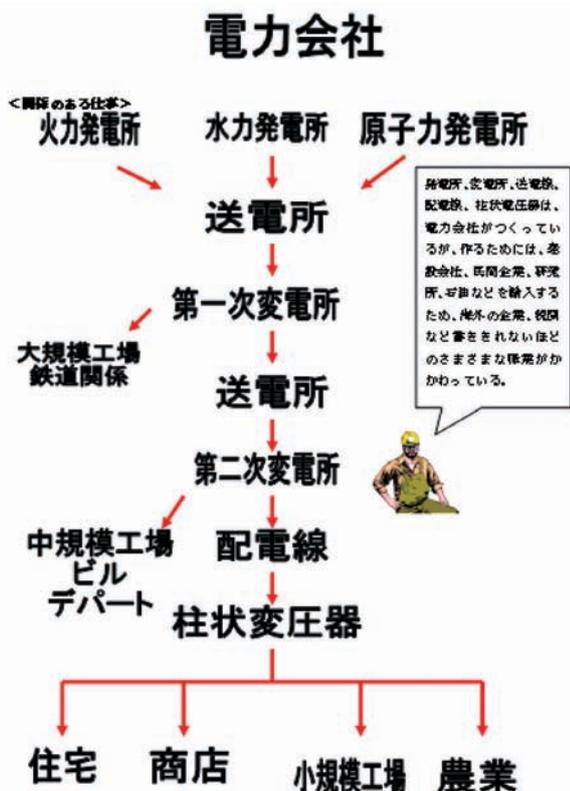


図2 生徒レポート例。エネルギーについて電気をテーマに様々な関連企業などを調べ、図にまとめた。

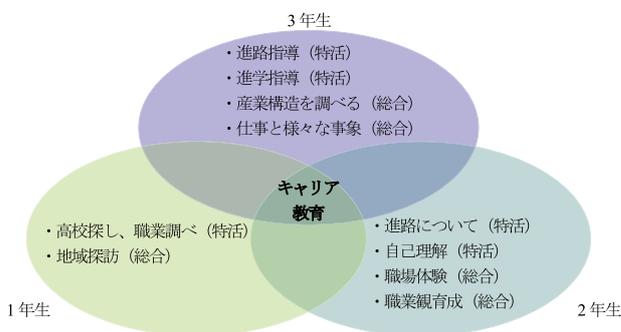


図3 福島中学校におけるキャリア教育の相関図

7. 情報機器を活用したへき地教育の新展開

インターネットを駆使した調べ学習に限らず、情報機器には様々な可能性が無限に広がっている。例えば、今

回の研究実践にあたり、webカメラを活用した双方向のティームティーチングにも挑戦した。webカメラをパソコンに接続すると、インターネットを介して動画と音声をリアルタイムで双方向通信することができる。写真2にwebカメラを使った双方向遠隔授業を行うための構成を示す。写真には双方向遠隔授業に必要な①インターネットに接続したパソコン、②Webカメラ、③マイク付きヘッドホン、などが写っている。写真は理科の授業の様子を表しているため、④演示実験用の道具、なども用意されている。学校のインターネット普及率はほぼ100%であるため、②③を準備（市販品3千円程度）すればすぐに実施可能である。特殊な装置を必要せず、極めて安価に導入することができるのが特徴である。これを活用することで、例え数千キロ離れていても、お互いの顔を見ながら自由に会話することができる。もちろん、教育資料や写真なども扱うことができる。教室のよ



写真2 webカメラを使った双方向遠隔授業を行うための構成。①インターネットに接続したパソコン、②Webカメラ、③マイク付きヘッドホン、④演示実験用の道具。

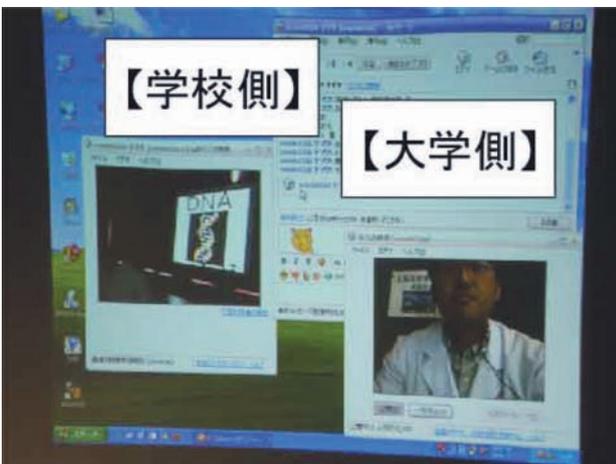


写真3 webカメラを使った大学とへき地学校の双方向遠隔授業の様子

うなスペースでパソコンの画面をプロジェクターなどで拡大すれば、教室にいながら外部の講師から教えを受けたり、質問したりすることができる。多分に実験的であったため、理科の授業の中で福島中学校の理科室と北海道教育大学函館校の生物工学研究室を結んで双方向遠隔授業を行った。写真3にその様子を示す。松浦がゲストティーチャーとして中学校の授業に参加し、生徒が調べたことの中で疑問に思ったことを松浦に質問するという内容となった。訪れる機会のない大学の先生にリアルタイムで自由に質問できたことから、生徒は大変意欲的に学習に向かっていた。また、専門的で難しい質問についても、大学の先生にわかりやすく答えをもらえたため、生徒の知識の発展という点でも非常に役立った。このような大学とへき地学校との連携授業に関する取り組みは、ますます需要が高まることが期待されている。

8. おわりに

キャリア教育の実施には、学校の教育課程全体を見渡し、職業に関する教育という一つの目標に向かって教育課程を見直し、各教科をはじめとする教育活動全体の横のつながりを再確認することが必要である。また、学年ごとの発達段階に応じた教育課程の編成、すなわち縦のつながりを見直すことも必要となる。これら2つが達成できて初めてキャリア教育を実施できる。可能であれば少しでも体験的な活動の時間を多くすると、生徒の感動が強まり、より高い成果を上げる事ができるであろう。しかし、「はじめに体験ありき」では、教育課程の組み方として本末転倒であろう。また、限られた短い時間の中で様々な調べ学習を行い、個人個人が膨大な資料や体験をまとめるためには、同じく縦と横の発達段階を考えた教育活動が必要である。特に、福島中学校のような情報教育の成果がへき地学校と言う学習環境において非常に有効であることが、本研究実践において十分に確認することができた。今後さらに研究を深め、実践を重ねていくことで、地域による教育格差をなくし、へき地学校の児童生徒にも十分な教育環境を提供できるであろう。

謝 辞

本研究実践にあたり、福島町立福島中学校の校長をはじめとする教職員の皆様にこの場を借りて深く感謝申し上げます。特に、研究部として情報教育の推進にご尽力いただいた梶原麻紀氏（現北斗市立上磯中学校）および小川直美氏（福島中学校）、また学年団として実践に当たっていただきました岡室伊知郎氏（福島中学校）に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 大阪府職業カウンセリングセンターホームページ
(<http://www.pref.osaka.jp/sogorodo/counseling/>)
- 2) 文部科学省ホームページ (<http://www.mext.go.jp/>)
「『若者自立プラン』における文部科学省の取り組み
について」・「進路指導・キャリア教育について」・
「進路指導・キャリア教育等の施策の推進について」
- 3) 北海道教職員組合編,「第12分科会」:2005北海道
の教育40,245-262,2006.
- 4) 北海道教職員組合編,「第12分科会」:2006北海道
の教育41,243-260,2007.